図書館旧館改修工事と資料移転

木下（きのした）　和彦（かずひこ）
（三田メディアセンター課長）

図１　工事中の旧館正面（2017年５月）[1)]

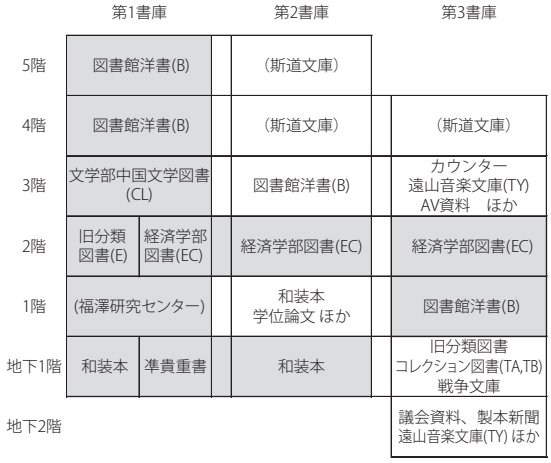

図２　旧館の構造と2015年時点の資料配置
（書庫部分のみ）

１　図書館旧館改修工事の概要

2017年９月現在，図書館旧館（以下「旧館」）の改修工事が着々と進められている。この工事は正式には2017年２月から着手され，工事の事後処理を含めると2019年５月末まで２年以上にわたり実施されることになっている（図１）。

“旧館”は一つの建物と考えられているが，実は３つの構造体が一体となったものである。大会議室や福澤研究センターなどを含む“本体（第１書庫を含む）”，メディアセンターの書庫のほか，斯道文庫も入っている“第２書庫”と“第３書庫”の３つである（図２）。本体は明治45年に竣工したレンガ造（一部鉄骨鉄筋コンクリート造）の建物で，重要文化財といわれるのはこの一部分である。第２書庫は昭和２年，第３書庫は昭和36年に竣工しているが，竣工年代が示す通り，こちらは（鉄骨）鉄筋コンクリート造である。外観からは区別がつきにくいのだが建物の構造はこのように異なっており，今回の改修工事の目玉はレンガ造である本体の耐震対策工事ということになる。

耐震対策工事というと，窓枠や柱などに鉄骨ブレースを添えるなどして補強する工事がよく行われるが，レンガ造の建物ではこの方法では補強が不十分で建物の外観・内観を損なうことから，今回の工事は免震レトロフィット工法という方法で行われることになった。この工法は，誤解を恐れず簡単にいえば，建物の下の土を掘りだし，建物と地面の間に免震層（免震装置）を設ける方法である[2)]。なお構造的に切り分けにくいことから，第２書庫もこの免震工事の対象となっている。

２　改修工事のはじまり ～2015年度～

前述した通り，工事は2017年２月から（つまり2016年度末から）開始されたが，その前の準備期間は2015年度にまで遡る。

管財部から旧館の改修工事を行うことになりそうだと連絡があったのは2015年９月のことであった。実はこの時点で工事することはほぼ決まっており，10月になると，本体部分への立ち入りを2016年１月上旬から禁止することが公式に学内に告知された。この時期から立入禁止になったのは，その時点では早ければ2015年度中から工事に着手する可能性もあったためだが，いずれにせよ重要文化財を保存・改修するためには工事開始前に詳細な調査が必要で，１月からその調査が開始されることになっていた。

立入禁止エリアとなる第１書庫に，三田メディアセンターはこの時約15万冊の資料を配置しており，これをどこか別の場所に移すことが喫緊の課題となった[3)]。９月以後，管財部と移動先について協議

を続け，８万冊分は三田キャンパス周辺の倉庫を提供してもらい，書架や空調設備を設置し書庫として転用できることになったが，残る７万冊は別の方法を考える必要があった。これは最終的に，１冊単位での資料の出納・搬送に応じてもらえる外部の倉庫（書庫）業者が見つかり，そちらに預けることで決着した。このように細部を詰めるまでの準備にはさまざまな問題を解決する必要があり，資料移動計画が固まった時には12月になっていた。もはや立入禁止措置前に資料を移動させることは不可能であったので，資料移動は１月から２月にかけて行うこととした。そこで，資料移動までの間に限り，立入禁止措置後もスタッフによる１日１回限りの入庫が認められることになった。これにより，出納という不便な方式ながら，利用者への資料提供は維持することができたのである。

利用者への広報は，まず10月にその時点で把握している情報を三田メディアセンター協議会委員に説明することからはじまった。この時点で第１書庫が閉鎖されるまでには３か月を切っていたため，全てが説明できなくても，確定した情報から早めに周知することを心がけた。10月には第１書庫が閉鎖されるという事実だけを取り急ぎ知らせ，その後資料が移せることになってからは，今後の資料利用の展望や移動日程を順次周知していくという具合で，全体像をまとめて周知できたのは12月中旬であった。10月から広報していたとはいえ，全体像が周知できたのは閉鎖まで事実上２週間というタイミングであり，利用者の方々にも大変な不安と負担を強いることになってしまった。

三田メディアセンターには利用者から直接のクレームはなかったのだが，秋からの労働組合の団体交渉では，この旧館のことが大きな問題として取り上げられた。当初は第一書庫資料を研究者に相談なく利用できなくするのは研究教育の軽視だという点，資料を移動し利用が継続できることになってからは，移動先の保管環境（温湿度管理含む）などが問われたようである。このことは図書館資料の利用を望む教員の研究者・教育者としての真摯な姿勢の表れであろう。それだけ図書館やその蔵書が大事だと教員に捉えられていることを改めて実感し，この問題に対処していく上で大きな心の支えになると同時に，改めて利用者のために最大限配慮できる方法を探ることに気を引き締めなければと思わされたのだった。

この時に移動した資料（第１書庫配架資料）とその移動の概要は以下の通りである。（カッコ内のアルファベットは請求記号）

（2016年）

1/8	旧分類図書(E)	18,000冊	学外書庫[4]
1/12	和装本	12,500冊	学外書庫
2/3-5	文学部中国文学図書(CL)	43,000冊	研究室棟地下書庫[5]
2/8	経済学部図書(EC)	9,300冊	別館J
2/8	準貴重書	6,200冊	別館J
2/15-19	図書館洋書(B)	59,000冊	別館T

「学外書庫」というのは外部の書庫業者の書庫（埼玉県川越市），「別館T」「別館J」は三田キャンパス周辺で管財部から提供された書庫である。どの資料をどこに移すかは，資料のボリューム（資料群自体のボリュームと，移動先の収容可能ボリュームの両方）や資料の性格（想定される利用者が多いか少ないか，資料の使われ方等）をはじめとして様々な面から検討して決定した。移動によってこれらの資料は原則として出納による利用となり，利用者が直接書架で資料を見ることはできなくなったが，別館Tと別館Jからは当日または翌日，学外書庫からであっても依頼の２日後（土日祝日を除く）には資料が提供できる体制をとっている。

3　耐震壁設置工事 ～2015～2016年度～

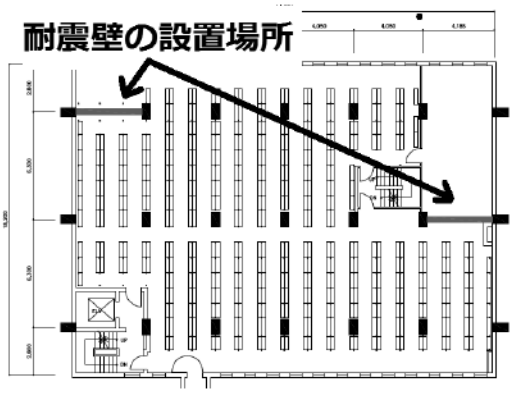

図３　旧館第３書庫１，２階の耐震壁設置場所

今回の改修工事では，免震工事の対象外となっていた第３書庫についても補強のための「耐震壁」を１階と２階に設置することになった（図３）。この

工事はコンクリートを流し込み固める作業を含むため，2016年４月中旬から６月上旬までの２か月にわたるものであった。

耐震壁は，書架を一部撤去して設置するのだが，文字通りその後は壁となってしまうので，この箇所の資料もどこかに移す必要が出てきた。２階の経済学部図書（EC）は空いている場所を詰めていくことで解決できたが，１階の図書館洋書（B）は書架に全く余裕がないため，同じく第３書庫の地下１階に仮置きすることになった[6)]。撤去される書架に置かれていた資料は，請求記号の並びとしては連続していなかったので，そのまま移動させると抜き出した部分が歯抜けになり利用者にとっても管理上からも複雑になってしまう。そこで，請求記号が連続し，かつ減る書架量と同じ分量の資料を選んで地下１階に移し，１階内では撤去される書架を避けるように資料の並べ替えを行った。これらの移動は前述の2/15～2/19の図書館洋書（B）の資料移動の際に同時に行ったが，見かけ以上にハードな作業となった。

4　資料移動は続く ～2016年度～

最初に述べた通り，今回の工事は免震装置を設置するのに建物の下の土を掘り出すため，本体と第２書庫の最下階（地下１階）の床を全面的に壊すことになっていた（図４）。第１書庫の資料はすでに移動済みだったが，第２書庫には資料が配架されていたので，工事が目前に迫りこれもどこかに移動させる必要が出てきた。

これとは別に，工事中に建物が水平を保っているかどうかを計測する機械を，２階の内部壁面の周囲をめぐらすように設置する必要もあった。機器設置場所だけで良かったとはいえ，こちらも第２書庫の該当場所の資料を移すことになった。

地下１階には和装本，２階には経済学部図書（EC）が配架されており，いずれも前年度に同じ資料を運び出した場所（和装本は学外書庫，経済学部図書は別館J）にそれぞれ収容できるスペースがあったので移動先に頭を悩ます必要はなかったが，それでも移動計画を立案，周知し，なるべく利用に支障の出ないように実施するのは神経を使う作業となった。

これら（第２書庫配架資料）の概要は以下の通りである。（カッコ内のアルファベットは請求記号）

（2017年）

1/11-12	和装本	12,500冊	学外書庫
2/3-4	経済学部図書(EC)	5,600冊	別館J

5　工事に伴う様々な変化

改修工事によってキャンパスの景色も大きく変わっているので，それらについても記しておこう。

(1) 福澤諭吉像の移転

旧館正面入口脇で我々を見守ってくれてきた福沢諭吉像は，工事に際して2017年１月に撤去され，２月に三田演説館前に設置された。

(2) ヒマラヤ杉の伐採

旧館の周囲には，大きなヒマラヤ杉が２本立っていた（図５）。これらは床面を掘削するという工事の性格上どうしても障害になるため2016年12月に伐採されることになった。記録を遡ると1920年代に植樹されたようで，樹齢100年に及ばんとする大木の伐採を惜しむ声も多数あった。伐採された木の一部は保管され，再利用が検討されている[7)]。

また旧館正面の植栽も同時期に剪定・撤去された。

図４　床面掘削中の第２書庫地下１階（2017年４月）

図５　旧館正面と東側のヒマラヤ杉（2016年12月）

(3) 旧館入口の改修

ここでいう「入口」とは，前述の福澤像があった正面入口ではなく，三田メディアセンターと斯道文庫が使用している入口のことである。この入口がある第２書庫と第３書庫の間も掘削する必要があるため，2017年５月に入口の改修工事が行われた。来年度（2018年度）中には，工事の進捗にあわせてもう一度入口を改修する予定になっている。

6　さいごに

この旧館改修工事とそれに伴う資料移動は，ある日突然降ってきた天災のようなものだった。ちょうど山中資料センター２号棟竣工に伴う資料移動中であったこともあり，平行して２つの資料移動を扱うのは本当に大変な作業であった。しかし，立て続けに資料移動を行っていく中で，これらの資料移動は，三田メディアセンターの中長期的な資料再配置を考える上では，願っても決して得られない機会なのだと思うようになってきた。

計算上は，三田メディアセンター内の書架はすでに100%に近い状態で資料が配架されている。書架の占有率が80%を超えると，新着資料を並べるのに苦労し事実上満杯，というのが一般的な見方である。書架を見るとあちこち空きがあるように見えても別の場所では天板の上にも資料が置かれていたり，あるいは書架一面にびっしり資料が収まった場所だと数冊の資料を入れるために書架何本分も資料移動を余儀なくされたりしているのが現状なのである。

山中資料センター２号棟への資料移動は，この100%近い書架の状態を解消するために行ったのだが，空いた書架を活用するためには資料を再配置する必要があることはわかっており，それをどう実現するかは課題であった。資料を再配置する際には一時的に資料を仮置きする場所が必要だが，旧館工事のおかげで，それを一時的にではあるが図書館の外に設けることができたのである。

資料再配置の本格的な実行には旧館の工事完了を待つ必要があるが，逆にその時間を活かして計画をしっかり立てられれば，仮置きした資料を戻す際に円滑に資料再配置を実現できるだろう。この千載一遇のチャンスを逃せば，大規模な資料再配置は不可能といってもいいかもしれない。このように考えられるようになってくると，旧館の改修工事は天災どころか福音とすら思えるようになってきたのである。

改修工事はいまだ進行中であり，今後も資料移動は発生する可能性があるが，目先のことにとらわれず，長期的な視点でどの資料をどのように移動させれば，後々効果的な再配置ができるか，このように考えて今後も対応していこうと考えている。

注

1）写真は管財部からの提供。
慶應義塾広報室．“図書館旧館改修工事進捗状況について（2017年８月）”．慶應義塾．
https://www.keio.ac.jp/ja/news/2017/8/2/27-22756/，
（参照　2017-09-15）．

2）免震レトロフィット工法ついては，以下を参照。
戸田建設．“今ある建物を丸ごと免震「免震レトロフィット」”．戸田建設．
http://taishin.toda.co.jp/new_tec/retorofit.html，
（参照　2017-09-15）．

3）この時，白楽サテライトライブラリーから山中資料センター２号棟への50万冊の資料移動を並行して実施していた。この詳細についてはMediaNet No.23の特集記事（p.26～40）を参照。

4）旧分類図書（E）は，その後2017年３月に学外書庫から山中資料センター２号棟に移動した。

5）文学部中国文学図書（CL）はほとんどが中国書で，復刻や合綴も多く書誌事項だけでは著作物を特定できないケースが多い。そのため利用者が自分で手に取って中身を確認できる場所に収める必要があり，研究室棟地下書庫にあった製本洋新聞を学外書庫に移すことで配架場所を確保した。

6）第３書庫の地下１階には，（山中資料センターへの移動準備で）白楽サテライトライブラリーに資料を移したためにちょうど空いている書架があった。

7）伐採前には安全祈願とヒマラヤスギに対する感謝の気持ちから，米・塩・酒が供えられた。また再利用の方策の一つとして，この木材を利用したストラップが制作され2017年９月から慶應義塾公式グッズとして販売されている。